

オーナー若き日の足跡

愛する緑の大地 5月の日記





【野口久義著『愛する緑の大地』（13）】

4、五月のたより〈1〉

5月1日（水）

きょうはメーデーで休日。

岩登りをしに行く予定だったが、雨が降っているので中止にする。

昼ごろヘルナンとヘルナンの家の隣に住んでいるフリッツ（使用人もフリッツというので、身体の大きさで区別し、きょう来た人をプチ（小さい）フリッツ、使用人をグラン（大きい）フリッツとぼくらは呼んだ。）が放牧場の杭を調べにきた。ぼくらは二人に日本茶をごちそうする事にした。二人共「オオ、シュクル（さとう）！」と言った。

二人はすぐ帰っていった。

午後、雨も上がったので岩登りをしにコロージュへ下った。福田君だけは一人でいたいと言うので三人で登った。夕方になってからジュシイへ寄ったり、夜ジュネーブの街を散歩し、10時ごろ山荘へ帰った。

「こんな遅くまで、どこでうろうろしているんだ。飯を食べさせてくれないのか！」福田君はぼやいた。そのはずだ。ぼくらは夕食の買い物も兼ねてコロージュへ下ったのだから。

5月2日（木）

はれたり、くもったり、強いにわか雨が降ったりのととても変わりやすい天気の日だった。

夕方、買い物のためコロージュへ下った。買い物のあと、シャモニーにいる近藤先生に電話をし、登山用品の間屋をしているエドワール・フレンドの店へ行くのを来週の月曜日に決めた。

クロワセットに戻ると、東側の谷にモンブランまで続いていそうな大きな虹がでていた。その虹の上をモンブランまで歩いて行けたら、どんなに楽しい事だろう。

5月3日（金）

明るい朝のおとずれと共に小鳥たちの歌がはじまる。露にぬれた草や花が太陽のめぐみを受けて七色の光をはなっている。久しぶりの太陽と青空だ。

木々の緑もいっそう美しく映える。人間も鳥も草も花も、あの澄んだ青い空を見ると明るくのかなになるんだろう。ああ、この広い世界の何もかもが青と緑とに染まってしまいそう。放牧場も日増しに緑が濃くなり、花の種類もずいぶん多くなった。つくしんぼうを見つけ、「ああ、ヨーロッパにもあるんだな。」と思ったりする。

1時間に一度の休憩に飲んだワインやグラッパ（地酒の一種でサクランボから作る。アルコールは45度）のために、4人共ふらふらでクロワセットから山荘への牧草地をたどった。夕食を作るのもめんどくさいほどの上機嫌で、それぞれが好きなように過ごしている。それにしても、ヘルナンやグラン・フリッツはなんて強いのだろうと感心してしまう。

【ヨーロッパにもあるつくしんぼ、日本にもあるサレーブの草原】

1968年ヨーロッパのサレーブにもつくしんぼを見つけた野口さんは、日本にもサレーブにあるような草原を見つけ、1976年から坊平高原に住むようになる。

最初の写真は、野口ペンション近くの園地を愛犬のセントバーナード犬バリィと共にジョギングする野口さん。1982年頃か。野口久義著「坊平ペンションだより」（1984）東京新聞刊の中扉写真（部分）。

2番目の絵は、クロワセットで見たモンブランまで続いていそうな大きな虹の挿絵。
3番目の絵は、第4章の中扉の挿絵。サレーブの草原で見つけたつくしんぼ。



続いていろいろな大きな虹がでていた。その虹の上をモンブランまで歩いて行けたらどんなに楽しいことだろう。



雪の国の大地

4 五月のたより





【野口久義著『愛する緑の大地』（14）】

4、五月のたより〈2〉

5月4日（土）

面接のときに、ヘルナンは土曜日が休みだとも仕事をやるようにとも言わなかった。ぼくらは牧場の仕事に休日などないのを知りながら、“欧米並みの週五日制”に合わせて今までやってきた。でも、きょうは仕事だ。月曜日に休みをとってエドワール・フレンドの店へ行くことにしてあるから、振替出勤なのだ。

山荘の前の広場でヘルナンのくるのを待っているが、なかなかやってこない。ヘルナンと一緒にこの山荘の廻りで仕事をやるからだ。待っている間、レスリングをしているのは福田君とぼく。夜は向かい合ってフランス語の勉強を真剣にやっているが、ひとたび戸外にでるともう籠から放された小鳥のようにはしゃぎまくるのだ。人間は常に精神的な疲労と肉体的な疲労が釣り合っていないなければならない。

10時になってようやくやってきた。ヘルナンとグラン・フリッツとプチ・フリッツの三人だ。きょうは、隣の放牧場との境に杭を打ち鉄条網を張った。隣の放牧場には牛が放されているため、柵には電気が流れている。わずか13.5ボルトでも、触れると腕のつけ根あたりまでビリビリとする。放された牛は、もの珍しそうに近寄ってきてはベタベタとぼくらをなめた。ヨーロッパの女性はスタイルがよくて抜群だけど、牛の女性はどうも興味がわからない。あえて言えばミルクと肉だけだ。

昼食は男ばかり7人でやった。コック長はヘルナンだ。ヘルナンが料理をしている間に二人のフリッツを紹介しておこう。

使用人のグラン・フリッツは40才で独身。1メートル85センチの身長で身体もごつい。ドイツ系スイス人で言葉はまずドイツ語、次にフランス語を使う。杭を数えるのに両方使って数えるところが面白い。右手の小指がない。グラッパの愛好者で三度の食事の前後、休憩中には欠かしたことがない。今は・・・もちろん飲んでいる。ほろ酔い加減でギターをつまびきながら、身体に似合わずやさしい小さな声で歌い始めた。午後になって、大木をトラクターに積んで口ぶえを吹きつつ意気揚々と離れた放牧場へ引き上げていった。

プチ・フリッツは56才、18才の息子と16才の娘さんの父親である。背は低い1メートル60センチ。やはりドイツ系スイス人でヘルナンの家の隣に住んでいる。

「雨の日は何をしているの？」

「薪割りをしているの。」とぼくたち。

「寝ていればいいんだよ。」と言いながら、身体に似合わず大きな声で笑った。料理をしているヘルナンが振り返って「なに？」という顔をしていたが、ぼくらに合わせて笑った。

午後は大きな杭を担いで広い放牧場の廻りの壊れた杭のところへ新しく打ち直して歩いた。プチ・フリッツはさすが杭打ちは辛いらしくかわいそうだ。

「娘さんを紹介してくれたら、二人分の仕事をしてもいいですよ！」と冗談をいいながら杭打ちは全部ぼくらがやった。途中夕立にあってびしょ濡れにしまったが、そのまま続けた。ぼくらは、ヘルナンと一緒にだと楽しくてしかたなかった。手持ちの杭がなくなり山荘に引き上げた。ワインを飲んでいたが、雨はいっこうにやみそうになくヘルナンとプチ・フリッツは帰って行った。

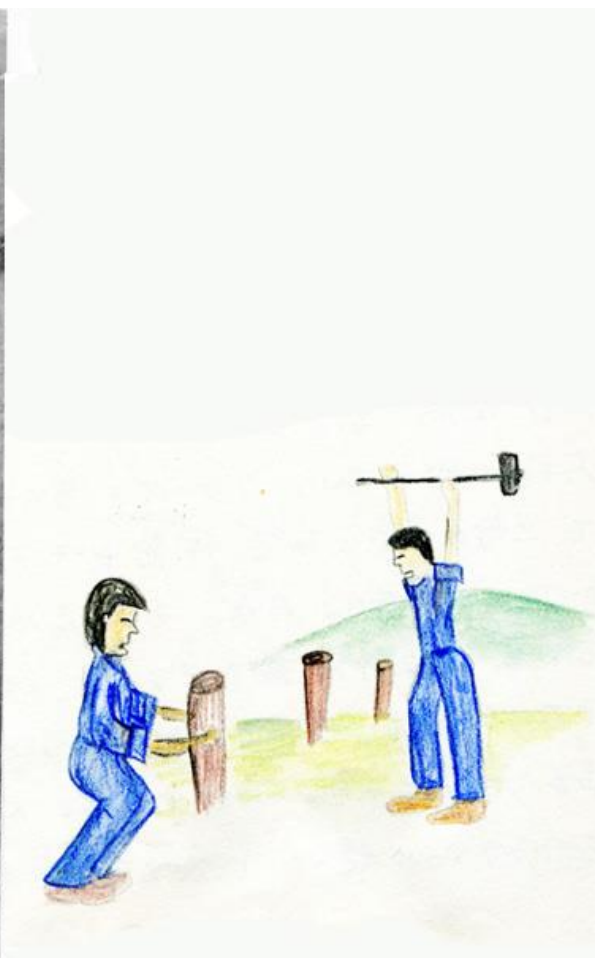
部屋の掃除と食事、その後勉強を始めたが、ワインの飲みすぎで集中せず横になる。今度は、昼間牛舎のそばの山荘にいたヘルナンの友人というアベックの女の人がぼくの前に現れて離れなくなりました。目がとってもきれいな人でぼくは吸い込まれるんじゃないか、と思ったほどだ。あの目がぼくをじっと見つめているような気がして……。眠れない夜だった。

【プチ・フリッツとの粹な会話】

「寝ていればいいんだよ。」は笑える。

最初の写真は、仕事をした放牧場と牛たち、遠くに休日に岩登りをした岩場が見える。

2番目の絵は、杭打ちをしている挿絵。二人共つなぎを着ている。



オーナー若き日の足跡 No.17 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（15）】

4、五月のたより〈3〉

5月5日（日）

いつもの時間に手島君に起こされる。この1ヶ月の間、朝食など用意したことのない手島君が朝食の用意もしてあるとは……。どういうわけかと思ったら、一晩中起きていたのだった。休日だから朝寝坊しようと思っていたのに、三人はしぶしぶ朝食をとった。

きょうは手島君に散髪をしてもらおう。この緑色の王国では、手島君とぼくが理髪師だ。ヒゲはそらない。伸ばしっぱなしにしてある。

午後2時ごろ、ヘルナンと奥さん、ヘルナンの友人のイタリア人兄妹、その妹の娘さんが遊びにきた。ワインを飲んだり、ギターに合わせて歌ったりする。“南国の夜”を歌うとヘルナンはフラダンスを真似て踊りはじめた。“ラ・ノビア”は全員で歌った。

明るい午後の陽光をさんさんと浴びながら、スイス人、イタリア人、日本人がフランスの地にある山荘で歌っているなんて、本当に平和そのものだ。全世界の人々がそうでありたいと祈らずにはられない。

ヘルナンは日本からの便りも届けてくれた。

山の友人、車さん（昨年芳野さんとヨーロッパを訪れ、このサレーブの岩場にも来ていてヨーロッパ・アルプスのことは非常に詳しい人だ。）の便りを綴ってみると、

『・・・今諸君は何をしようとしているのか？だいたい夏が来るまでペンキ塗りをしたり、木の根っこを掘り返したりしているだけとは情けない。どだい、あのあたりの国境にいるポリ公はノーマクエン野郎ばかりだから、あいつらをごまかしてヒトモーケ位のことを考えた方がいい。モシカスルト、サレーブの工事現場（採石場）からダイヤモンドが出てくるかも知れない。あそこはどうもそんな気がしてならないのだ。絶対に目を離すな！！オボマルティ（ココアとミルクを合わせた幼児用飲み物）なんぞ飲み、ミルクくさくなっているばかりが能じゃない。あの近くを流れている川で四つ手網を張ったりしたまえ。モシカするとデッカイうなぎがひっかかるかも知れない。そうしたらうなぎ丼をたべよう。まあとにかく元気でやりましょう。ダイヤモンドがみつかるまでは極くジミにやって下さい・・・。』

ぼくらは涙の出るほど腹を抱えて笑ってしまった。

夕食は手島コックによるスパゲティ。ソースが強烈なのだ。玉ネギとサラミソーセージの微塵切りと油、バター、味噌を入れて、ギトギトしたものだ。0時ごろまで手紙を書いたり勉強したりする。時々油っぽいゲップがでてくるので正露丸を飲んだ。

【4人の楽しい休日】

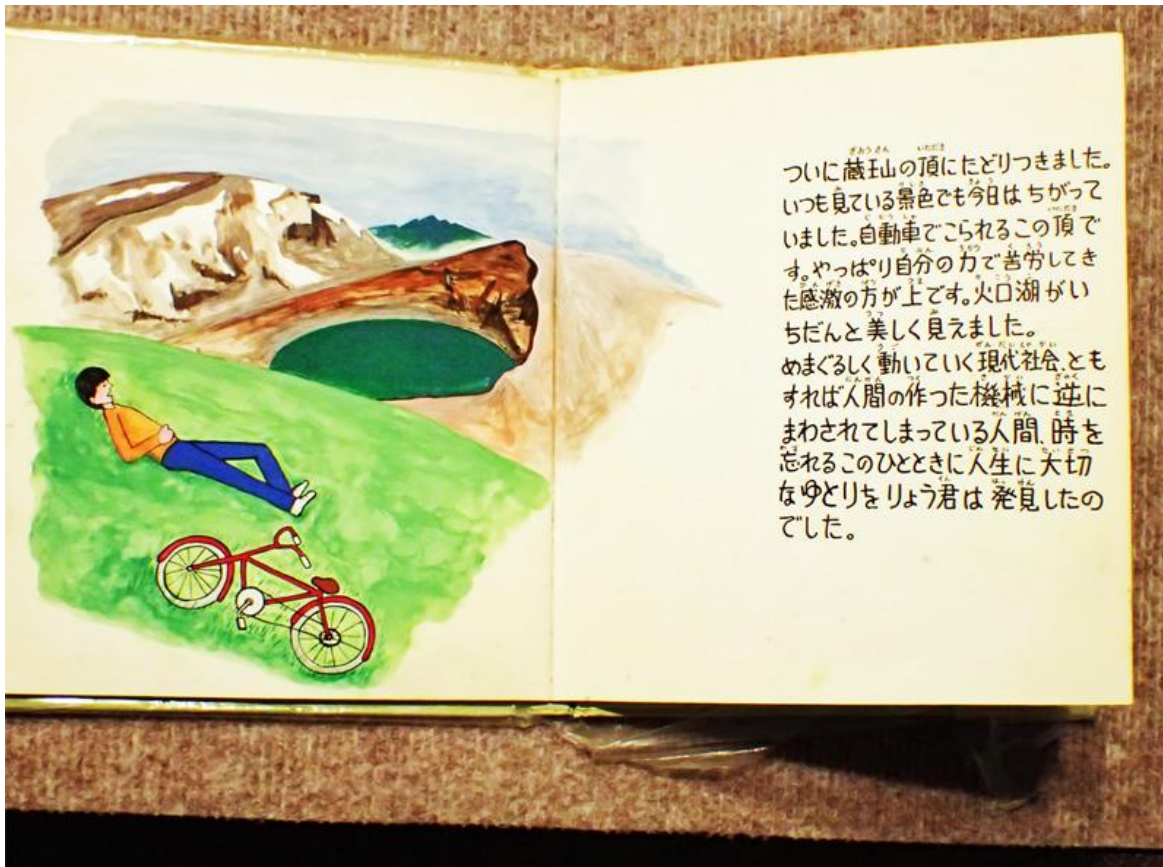
ヘルナンたちの来訪、共通の山の友の愉快的な手紙、手島君の強烈な料理。すべて楽しい思い出だ。

最初の写真は、野口さんの書いた絵本の一コマ。主人公のりょう君が自転車で蔵王の頂上に着いた所。お釜と五色岳の絵が素晴らしい。野口ペンションの食堂本棚にある一冊。これからも機会があればこのような著作を紹介していきたい。子供も読めるようにふりがなを振ってあるのが嬉しい。

2番目の文章は、野口さんの書いた絵本の文章。りょう君が山を下る様子。丁寧に書かれた字だ。

3番目の写真は、野口さんの書いた絵本「自転車にのって頂へ」の表紙。挿絵が素敵だ。

4番目の写真は、野口さんの書いた絵本「自転車にのって頂へ」の最終ページ。もう43年前に書かれた本だ。一冊しかないので、野口ペンションに行って読むしかない。



ついに蔵玉山の頂にたどりつきました。いつも見ている景色でも今日はちがっていました。自動車でこられるこの頂です。やっぱり自分の方で苦労してきた感激の方が上です。火口湖がいちだと美しく見えました。めまぐるしく動いていく現代社会ともすれば人間の作った機械に逆にまわされてしまっている人間、時を忘れるこのひとときに人生に大切なゆとりをリョウ君は発見したのでした。

自転車にのって頂へ



作画 野口久義

頂をあとにします。下りは楽でさっきの苦労がまるで消えるようです。苦労したあと楽なのはほんとうにいい気分です。リョウ君の胸の中にはもう次の夢がふくらみつつあります。夢をはぐみ夢の実現のために努力していくとき人生にたいくつはありません。

書名 自転車にのって頂へ
 作画 野口久義 (34才)
 住所 山形県上山市蔵玉峠高原
 電話 02367-9-2773
 職業 パンション経営
 制作年月日 昭和53年9月20日



オーナー若き日の足跡 No.18 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（16）】

4、五月のたより〈4〉

5月6日（月）

小雨に煙るモンブラン橋のたもとで近藤先生夫妻と合流し、二台の車はジュネーブより南西に向かい、一路エックスレバンへと急いだ。ところが、今まで快調だったタウンাসが突然煙を吹き始めてしまった。休ませたり、水を入れたりで大変だった。エックスレバンはジュネーブから約80 kmの地点、低い山に囲まれ、湖があって大変美しい街だ。その小さな街の中心にエドワール・フレンドの店があった。

フレンドはフランスを代表するアルピニストであり、ぼくらに夏の登攀に必要な用具を格安で譲ってくれた上、アルプスの高山を登るためのアドバイスもしてくれたのだった。

だが、それから二ヶ月後フレンドはイタリアで交通事故のため亡くなってしまった。その時、ぼくはどうしてもアルプスの三大北壁の一つ、グランド・ジョラスを登るんだ、と思った。幾多の北壁の闘いのあと、輝かしい第二登（川崎注：1945年7月17日、1938年の初登から7年後、ガストン・レビュファと共に）をなすとげたフレンドの面影が、北壁のどこかにあるような気がするからであった。

帰路も難渋してしまった。シャモニーまで帰る先生夫妻は、ぼくらと一緒にでは遅くなってしまふので、アヌシーの街で別れた。ぼくらはこの街で買物を済ませ、車も十分休ませることにした。

ぼくはこのアヌシーの街をずいぶん前から知っている。フレンド同様フランスを代表するアルピニストだったルイ・ラシュナルの生まれ育ったところなのだ。ぼくはラシュナルが大好きだった。なんでも実行するのが早いところが好きなのだ。失敗したら・・・などと考えずに、自分がやるんだと考えたら全力をあげてやることだ。少年時代に登ったグレポンもそうだし、アデルとの結婚もそうだ。人類初の8,000メートル峰アンナプルナの登頂もそうだった。

また、力強い意志がなければあんな立派な山荘が自分の力だけではできる筈がないだろう。でも、ラシュナルは若くしてクレバスに呑まれて死んでしまった。通いなれたバアレ・ブランシュで・・・。

夕方の人ごみの中にふとラシュナルの姿を見つけて話しかけたくなるような気持だった。

買物を済ませたぼくらは車を走らせた。途中からサレーブの稜線の道に出て、稜線遠しにクロワセットへ向かった。煙を吐くのを防ぐため部品をひとつ外し、その代わりヒーターは入らず少し寒いが快調に走っているのがうれしい。ところが稜線上の道はひどい濃霧でまたまた大変だった。クロワセットに着いたときは内心ほっとした。愛車タウンাসにとっては、きっと大きな冒険だったに違いない。

親切な先生と奥さんはもうレビュファ山荘でお茶でも飲んでいるかも知れないな、と思いながら雨に濡れた牧草地をたくさんの山道具をかかえて歩いていった。

この日、4人の住んでいるジュネーブ近くの山荘からフレンドの山の店のあるエックスレバンに至り、シャモニーへ帰る近藤先生夫妻とアヌシーで別れるまでの経路を赤点線で示す。「新詳高等地図」（2003）帝国書院刊に川崎加筆。

3番目の写真は、グランド・ジョラス北壁。親切だったフレンドの面影を求めてこの北壁をどうしても登ると決意を固めた野口さんも凄い。ルイ・ラシュナル、ジェラルド・エルゾーク共著「若き日の山行」（1957）白水社刊より。

4番目の写真は、ラシュナルが自力で建てた自分の家。土台のコンクリートに入れた石は、劣化を防ぐために奥さんのアデルが磨きあげたそうだ。ルイ・ラシュナル、ジェラルド・エルゾーク共著「若き日の山行」（1957）白水社刊より。

5番目の写真は、エドゥアール・フレンド。近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。



オーナー若き日の足跡 No.19 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（17）】

4、五月のたより〈5〉

5月7日（火）

一面の銀世界

さわやかな五月の風を忘れたらしい

緑の牧草も

針葉樹の森もまっ白です
長い冬の間
雪の重みにじっと耐えて
ようやく咲きそろった小さな花たちも
みんな倒れてしまいました
小鳥の巣も
卵と一緒に飛ばされてしまいました
あたたかな五月のオゾンはどこへ行ったの？
春はどこへ行ってしまったの？
夜になって星がでましたでも、安心できません
春の嵐は気まぐれだからです
あしたになれば
五月のオゾンを
いっぱい浴びることができるでしょうか
生きるもの
すべてがそれを待っています

5月8日（水）

日本をでてから、もうじき3ヶ月になろうとしている。その3ヶ月の間常に不安に悩まされていた。初めは冬の岩壁の登攀だった。山のきびしさ、悪天候はいつもついて廻った。そしてぼくらは常に苦しめられた。しかし、ぼくらは全力をあげて目標のためにがんばった。そして、目標を達成した。

目標のために注ぎ込んだ行動の中から得るものは非常に大きかった。それから就職だった。今度は、ぼくらを囲むあたたかい人たちのおかげで解決した。そして就職、仕事。日本でさえ大変なのに、スイス人の下で働くのだ。やはり不安は大きかった。だが、それも時の流れと共に遠ざかっていった。働きはじめて1ヶ月、ぼくらはヘルナンと一緒に働いた方が楽しいと思うようになっていた。ぼくらは彼らからの問いかけに心から身体ごとぶつけていった。毎夜、遅くまで勉強しているフランス語がずいぶん役に立つようになっていった。そんなことも楽しみに繋がっていったのだろう。

きのう積もった雪が、春の陽光に照らされてみるみる消えていく。いつもぼくらの廻りについてくる不安が、今溶けていった雪のような気がするのだった。

5月9日（木）

夕食のテーブルにすわると、突然福田君に目をおさえられてしまった。

「なんだ、なんだ！」

「ちょっと待って……。さあ、いいよ。」

南川さんや手島君の声がする。そっと目を開けると、なんとケーキがあるではないか。そう、今日はぼくの誕生日だった。テーブルの上にはケーキだけじゃない。三人が腕をふるって作ってくれたたくさんの料理、いつもより上等のワイン。ぼくはこんなうれしい誕生日を迎えたことは今までになかった。それは料理やケーキやワインだけじゃない。三人の心づくしが、もっともっと大きかった。

今日の仕事の時だった。今までぼくらだけの仕事のとくにワインなど持って行ったことなどなかった。なのに、みんなひそかに持ってきてくれたのだ。午後はオレンジを持ってきてくれた。

「今日は野口さんの誕生日だもの、のんびりやろうよ。」

「夕飯は三人でうまいもの作るからさァ、楽しみにしててくれよ！」

「俺たちが野口さんの分までやるから、ゆっくり休んでいていいよ！」

三人は口々に言った。ほんとうにいい人ばかりだ。

その晩すっかり飲みすぎて食べすぎてしまったぼくは、ベッドに横になりながら人生の楽しさをひしひしと感じていたのだった。仕事の辛いのも言葉のわからないのも、お金のないのもみんな喜びだ。それにぶつかっていけるぼくがいるからだ、未来なんて不安だらけでいいんだ。それよりも、ぼくの廻り、ぼくらの廻りには親切で心のやさしい人たちばかりだ。そういう人たちと一緒にだったら、もう何も望むものはない。

南川さん、福田君、手島君、きょうは本当にありがとう。

【消えてゆく不安と楽しい誕生日祝い】

3ヶ月続いた不安の解消と、4人の楽しい生活。

最初の絵は、雪の重みに耐える草花。

2番目の絵は、誕生日のケーキとワイン。

3番目の絵は、フランス語の勉強に励む野口さん。





【野口久義著『愛する緑の大地』（18）】

4、五月のたより〈6〉

5月10日（金）

朝の食事当番だったぼくが起きると、すぐドアを叩く音がする。はて誰だろう、と思いつつドアをあけてみると、見たことのない人が立っている。その人はヘルナンの兄ということだった。ついてくるように言うので、顔も洗わず眠い目をこすりながらついて行った。着いたところはジュシイ（JUSSY）よりずっと西寄りにある大きな牧場だった。きょうからここで働くのだ。

ここでの仕事はとても辛かった。トラクターに付けた草刈機で草を刈り、トラクターに固定されている吸引機は刈り取られた草を後ろの台車に高く積み上げる。これを社長がやり、ぼくらは台車に山のように積んだ草をサイロにおろすのだ。濡れた草はとても重く、2～3台目が終わる頃にはホークを握る手にはマメができる始末だ。サイロにおろした草は平坦にし、その上にポテトチップスを撒き、トラクターで固めるのだ。これは冬のための飼料になるのだ。

サレーブでの仕事に馴れたと思ったら、今度はなお強烈な仕事だ。台車は休む間もなくやってくる。遊びにきたヨーロッパでこんな辛いことをしなければならないなんて・・・、と思ったが、ぼくらは弱い意志の人間にはなりたくなかった。みんな歯をくいしばってがんばった。

昼休みは1時間しかなかった。1時になると社長は草を刈りにでかけて行く。そして、ぼくらは草の山に向かうのだ。広々としたサレーブの放牧場であたたかな春の風に揺れている草はミソロジーの世界へと運んでくれるが、この死んでしまった草は重く、蝶もとまらず、ただホークが突き刺さるだけだった。

ここでの食事は大勢なので楽しかった。女の子4人、男の子2人、若い女中さん1人、使用人4人、それに社長夫妻とぼくら4人、全部で17人にもなるのだ。

食事のとき、使用人の一人に「朝は何時から仕事を始めるんですか。」と聞いたら、「4時だ。」と言った。『なんだ、お前はまだ寝ているじゃないか。』と、もう一人のぼくが言った。朝早くから夜遅くまで忠実に働き続けるひとたちを見ていると、がんばらなければいけない、と思うのだった。

さっきまでは、たった1日目にしてマメができ、それが破れてその上にマメがまたできて、それがつぶれて血がふきだした。これがあと何日続くかわからない、と思うとゾッとしたのだった。

5月11日（土）

きのうの疲労のために熱があり、頭が重く何をやってもすぐ飽きてしまって、とても不愉快だ。雨が降っているというのに、水道の出が悪い。ここの山荘の水道は地下水をくみ上げるものなのだ。

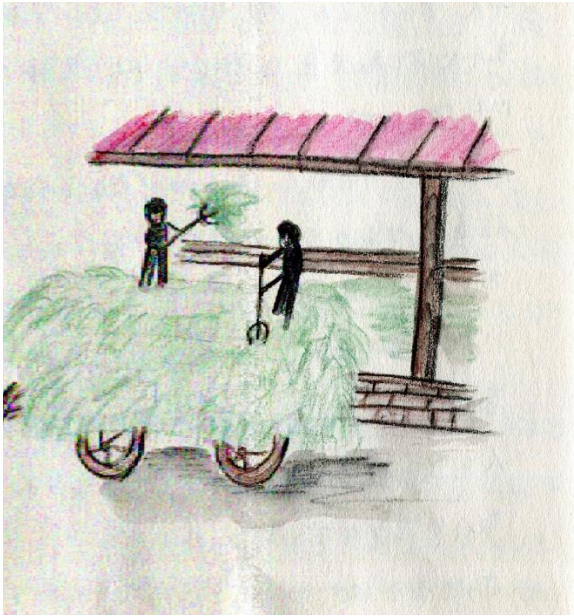
昼ごろ、ヘルナンの奥さんが一人で日本からの便りを持ってきてくれた。ヘルナンはアムステルダムへ遊びに行っているそうで、その間ヘルナンの兄の牧場で働くのだった。

5月12日（日）

朝食を終えたのが11時、3時に昼食、そのうち夕方になり、夕食だ。一日雨、時々雪さえ降った。頭の重いのがとれず冴えない一日だった。あしたを考えて早く寝る。

【ヘルナン不在で慣れない強烈な仕事】

死んでしまった牧草相手の重労働に手から血が噴き出す。休日の土日も体調不良。
挿絵は牧草の山をホークでサイロに入れる二人。



オーナー若き日の足跡 No.21 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（19）】

4、五月のたより〈7〉

5月13日（月）

休日は雨、月曜日の朝はスカッと晴れている。宇宙がどうにかなってしまったようだ。ヘルナンの兄の牧場へ行く。ところが、きょうはサレーブで働くのだと言った。クロワセットで待っているように、と言うので、ぼくらは12キロメートルの道程を引き返した。

クロワセットで合流し、約2キロメートル離れた放牧場へ行った。ヘルナンの離れた放牧場に行く途中にあり、ここでもバラの根っこ掘りだった。

昼食は5人で牧場小屋で済ませ、夕方5時まで仕事をやった。

帰りにクロワセットの小さなレストランでワインをごちそうしてくれた。

「あしたは草おろしだ。」と言うと一足先に帰っていった。

4人共ヘルナンの下で働きたいと願っている。兄の方は無口で、ただ黙々とやっているが、ヘルナンは冗談をいいながら、そして休憩中は仕事を忘れている。だから、ぼくらはヘルナンの和やかさに解け込んでしまっ、辛い仕事も楽しくなってしまうんだ。ヘルナンが傍にいないても、“ぼくらはヘルナンの下で働いているんだ。”という誇りを持ってられるんだ。

仕事なんてお金ばかりで解決するのじゃない。抱擁力のある上司の下で働くのが一番だ。自分や仕事ばかりかわいがらず、みんなを平等にかわいがってくれるヘルナンの下で早く働きたい。

5月14日（火）

ヘルナンの兄の牧場へ出勤だ。

きょうは菜っ葉のおろ抜きを午前中やる。大変腰の痛くなる、どちらかというと老人向きの仕事だった。

午後は草おろしだった。

昼のとき、アムステルダム帰りのヘルナンが日本からの便りを持ってきてくれた。いい事があったのか、いつもよりニコニコしている。ぼくらはヘルナンの笑顔を見たらなぜかほっとするのだった。

【ヘルナンの兄の元で働く】

辛い仕事が続く。

最初の写真は、野口ペンションの食堂にある野口さんが造った飾りもの。左は魔女の宅急便、右は花嫁（チョゴリザ）。カラコルムのバルトロ氷河沿いには同名の7,000m 峰チョゴリザがあり、あたかも純白の衣をまとった花嫁のように真っ白の雪で覆われた山だ。1892年にマーティン・コンウェイがブライドピークと呼んだ事から花嫁の峰とされている。

2番目の写真は、花嫁（チョゴリザ）。昔東京の四谷に同名の山道具屋「チョゴリザ」があり、このような2頭身の可愛い女の人のロゴマークを使っていた。

3番目の写真は、四谷の「チョゴリザ」で買った山スキー板の後方に描かれたロゴマーク。

野口さんの作品はカラーなのでオリジナルよりグレードアップしている。

4番目の写真は、2017年に野口さんが小学生の孫のために作成した日本地図パズル。各都道府県を外してはめ込むパズルだそう。器用で根気強い人でないとできない、と思う。野口佳子さんのフェースブックより。

5番目の写真は、チョゴリザ、K2の肩から撮影。WIKIPEDIAより





【野口久義著『愛する緑の大地』（20）】

4、五月のたより〈8〉

5月15日（水）

ヘルナンの兄の牧場へ行く途中、スイスの税関でストップさせられた。前輪のタイヤが磨滅しているから交換しろというのだ。この出勤の忙しい時間なのに、ぼくらはブツブツ言いながら交換する。交換した方がなお磨滅しているのに、交換したのがわかるとOKだから、また楽しい。それもボックスの中から出ようとせず、あごで「行け！」と言った。スイスの税関はタイヤに大変うるさく、フランスの税関は保険についてうるさいのだ。

午後になり、放牧地に放した仔牛たちを牛舎に入れるのだけれど、仔牛も狭い牛舎より広々とした緑の中で飛び廻っていた方がうれしいのだろう。なかなか素直になってくれない。牛の世界も人間と同じだ。楽しく遊んでいる子供を無理に家に連れて帰るのと同じだ。生きるもの、とくに子供は自由にあこがれている。自分のやりたいことは最後までやるのだ。大人になると自分が昔はそうだったのにも拘わらず、子供の自由を奪い、自分の曲がった意志を通さねば我慢できないのだ。

夕食は食欲がなかった。料理がおいしくないわけでも、夕方病院の残飯をドラム缶にいっぱい豚の餌のために運んだからでもなかった。

女中さんがかわいそうで、胸が苦しくなってしまうからだ。一生懸命に心をこめて作った料理も大勢の人がいるから、自分では満足に食べられない。日本のコインをあげても、子供たちや両親がはしゃいでいるだけで、彼女には見せてあげない。使う者と使われる者との差を強く感じた。よく働くのだし、両親も子供たちも、家族の一員としてかわいがってやってもいいと思うのだ。朝早くから仕事に追われ、まだ勉強もしたいだろうし、恋もしたいだろう。若いから睡眠はまだ十分とらねばならない筈だ。自由な時間など彼女にはないような気がする。日曜日はゆっくり休めるのだろうか。そんな環境の中で、力強く自分と闘いながら生きている彼女には、真の美しさが満ち溢れているのを感じた。きときびしさの中にそれ以上のよろこびがあることを知っているからに違いない。

夕食後、子供たちとバレーボールを少ししてから帰る。帰路はサレーブ稜線の道に入り、いつものように頂上の展望台で車を止めて、いつものように夕暮れの街を眺める。あかりをともし始めた街、夕餉の煙がのぼっているのが目に見えるようだ。ふと、日本を思い浮かべた。4人共、だまって眺めていた。

ここからクロワセットまでの4キロメートルの間、無免許のぼくがドライバーになった。隣では、手島助手がサイドブレーキを離さない。むろんギヤはロウ、制限速度は10キロだ。カーブの多いこの道で、もし対向車がきたらと思うと怖かった。

山荘へ続く牧草地を歩くぼくの足はワナワナと震えている。

【ヘルナンの兄の家の女中さん】

女中さんがかわいそうで、胸が苦しくなってしまう野口さん。心やさしい。

最初の写真は、ヘルナンの兄の一家と野口さんたち。野口さんは、左端に写っている。

2番目の写真は、麓の街を見下ろした写真。サレーブ山の展望台からだろうか。



ヘルナンの兄の牧場で 家族と共に



麓の街をみおろして



オーナー若き日の足跡 No.23 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（21）】

4、五月のたより〈9〉

5月16日（木）

ヘルナンの兄の離れた放牧場での仕事だ。夏の間ここで過ごす人もやってきた。根っこ掘り、ワラ運び、水呑場の修理などをやった。午前中は見えていたモンブランも、午後になるとものすごい入道雲がでてきて隠れてしまった。

ヘルナン一家がぼくらの働いているところへやってくる。ぼくらの放牧場にも仔牛が放されたとのことだった。

山荘へ帰ると、入り口のところに卵が30コも置いてあった。何もいわないで置いていってくれるヘルナン一家の人たち、なんて心あたたかい人たちなのだろう。

夏を知らせる本格的な入道雲がでてきてとても暑い一日、のどが渇いて水を牛のように飲んだ。

5月17日（金）

朝になるとぼくらの放牧場に放された13頭の仔牛たちが、山荘のまわりにやってくる。そして、彼女たちのカウベルが目がさめるようになった。

きょうは兄の放牧場での仕事。

昼休み、草を刈り取ったあとの原っぱで、ぼくの運転でジープを乗りまわした。人や車の往来する道路ではいやだけれど、こういう所だったらいつでもいい。

仕事が終わったあと、ジュシイへ寄り、吉城さんの家にも寄ってみた。吉城さんはお父さんが病気で日本へ帰ったそうだった。山川さんの家にも寄った。ほんとうの日本料理をごちそうになった。話がはずんで、山川さんの家をでるころは0時を廻っていた。

最近、ヘルナンの兄の牧場での仕事にも慣れ、ゆとりが持てるようになった。

【仕事にゆとりが持てるようになった野口さん】

ヘルナンの兄の放牧場の仕事にもゆとりが持てるようになった。ヘルナンの放牧場に放された13頭の仔牛。

最初の絵は、刈り取った放牧場で他の車を気にしないでジープを自由に乗り回す野口さんの挿絵。

2番目の絵は、山荘の入り口にヘルナン一家が置いていってくれた30コの卵の挿絵。

3番目の写真は、ヘルナンの放牧場に放された仔牛たち。



山荘のうらでくつろぐ子牛たち



オーナー若き日の足跡 No.24 川崎泰照さんの face book より

【野口久義『愛する緑の大地』（22）】

4、五月のたより〈10〉

5月18日（土）

2日間の休日を利用して、南川さんと手島君はシャモニーへ山登りに行くといい、福田君はどこにも行きたくない、という。

ぼくはジュネーブへ行きたかった。その理由は二つあった。そのひとつは、今まで言葉の方はいつもみんなに頼ってしまう時が多かったので、ひとりになって苦労してみたかった事と、もうひとつは、あしたの国防記念日にレマン湖で飛行機のデモンストレーションがあるので見たかったことだ。

山荘に残る福田君と別れて、三人は麓へと下った。アネマスの街でぼくだけ車からおりた。

「女中さんによろしくね。」

手島君がふざけて言った。ぼくが毎日のようにかわいそうだ、かわいそうだと言っているのに、ぼくが彼女に恋をしているから一人で行く気になったと思っているのだ。

「ボン、ボワイヤーシュ！（良い旅を！）」

と言って別れる。

いつもなら車であつというまに通ってしまうアマネスの街だが、きれいな公園をみつければ寄り道をし、また古物商をみつければ入り込んだりする。

車だとうるさい税関でも歩いてだとパスポートも見せずに入出国できてしまう。車だと密輸する人がいるのだろうか。

午後になっていよいよ始まった。凄まじい爆音を残しての低空飛行、湖への落下、ヘリコプターによる救助が中心だった。それだけではなく、水着姿の女性たちも見る事ができた。

デモンストレーションが終わると、ぼくの足は自然にジュシイへ向いた。ところが、近道しようとして枝道に入ったらわからなくなってしまった。近くで遊んでいた女の子に道を尋ねると、その女の子たちは自転車を持ってきて、1台をぼくにすすめ、もう1台に2人が乗ってついてくるように言った。行く道々「どこから来たの。」「ジュシイに何しに行くの。」などと女の子たちは聞いた。ぼくはそれに答えたり、ぼくからも問いかけをした。片言であっても会話ができてとてもうれしかった。

やがて見覚えのあるジュシイの十字路に来た。

「あそこの家に行くんだ。」とぼくは言い二人にお礼を言った。

「どういたしまして。」と言いながら、膝をチョコッと曲げてにっこり笑った二人がとても愛らしかった。

ぼくが一人で入っていったものだから、ヘルナンたちはびっくりしていた。奥さんが、

「夕食はどうするの？」

「ここに泊まるの？」

「他の3人はどうしたの？」などと聞いた。

ぼくは先生に答えるように片言で言った。

奥さんは、部屋の用意をし終わると、来ていた客とでかけて行った。

夕食は、ジャンピエールとオリビエと済ませ、食後は応接間でテレビを見ていた。膝では小犬のメリーがかわいらしい寝息をたてている。

5月19日（日）

ジャンピエールと朝の散歩をし、朝食のあと教会へ行くヘルナンと二人の息子たちにシャモニー街道まで乗せてもらった。

別れ際にヘルナンは「火曜日からはジュシイで働いてもらうから。」と言った。ぼくはうれしかった。みんなもそうだ。三人にいいお土産ができた。

ぼくは今度兄の牧場へ足を向けた。牧場では、使用人のおじさんに生まれたばかりの仔牛を見せてもらったり、ビールを飲みながらサレーブの話をしたりする。そこへ娘のシルビーやフラン

ソワ、息子のジャックにニコラが、そして女中さんが走り寄ってきた。ボール投げをしようと、みんなは言った。ぼくは童心にかえり、無心にボールを受けそして投げた。

昼食は子供たちと食べた。きょうの女中さんの料理はとてもおいしく、ぼくは二人分食べてしまった。みんなと別れたあと、ここで働くイタリア人のベルナードと一緒に国境を越えて一軒のバーに入った。ワインを飲みながら故郷のことや仕事のことを話した。出稼ぎの彼だが、お金の追われる様子もなく、とても明るい青年だった。

彼と別れたあと、アネマスの街はずれでヒッチすることにした。男がひとりのヒッチなんて止まってくれる車がない。近くにいたドイツの女の子二人に行く先を聞いたら、同じ方向だったので、すかさず、「アベック モア！（わたしと一緒に！）」

すると、すぐ大きなセントバーナード犬をのせたおじさんが止まってくれた。ぼくと同じくらいのでべろなめられるのには閉口したが、ガマンガマン。彼女たちはサレーブの展望台であり、ぼくはクロワセットまで乗せてもらった。

山荘に帰ると、福田君がぶっきらぼうに言った。「ゆうべはどこで泊まったんだ。晩飯を作っで待っていたんだぞ！」

シャモニーへ行った二人は天気が悪く、山には登れず、ツェルマットまで行ってマッターホルンを眺めてきたそうだった。そこへ付近を散歩してきた二人と、シャモニーへ一人で来ていた大金さんが帰ってきた。

夕食後久し振りに夜遅くまで騒いだ。

楽しかった二日間、もっともっと勉強しよう。そうすれば、よろこびはなお増すだろうから。

ベッドに入ると、仔牛たちのカウベルの音が聞こえてきた。きっと彼女たちは星があまりにもきれいなので、眠れないのだろう。

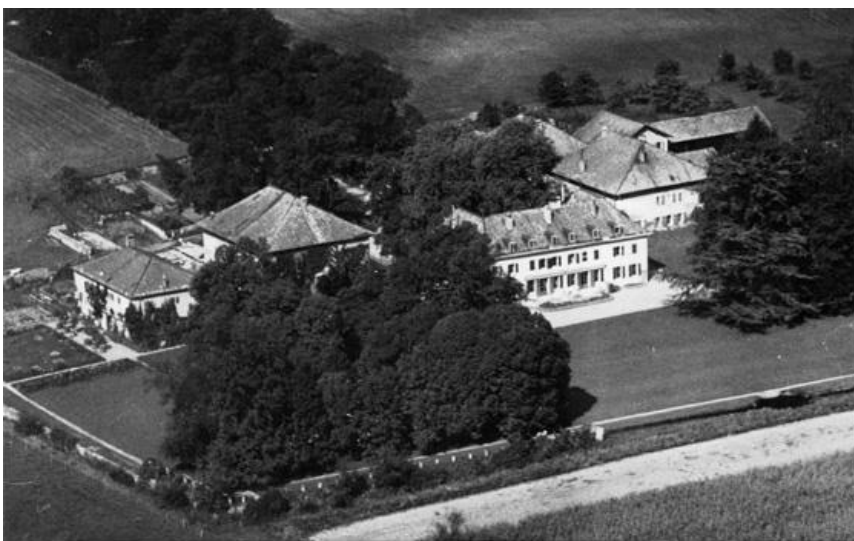
【野口さんの冒険、ジュネーブで語学修行の2日間】

語学上達はやはり単独に限る。また、余禄も多い。

最初の写真は、野口さんが一人で訪れたヘルナン・ブラデボン家の全景。広大な邸宅だ。空中写真であろう。

2番目の写真は、レマン湖における飛行機のデモンストレーション。

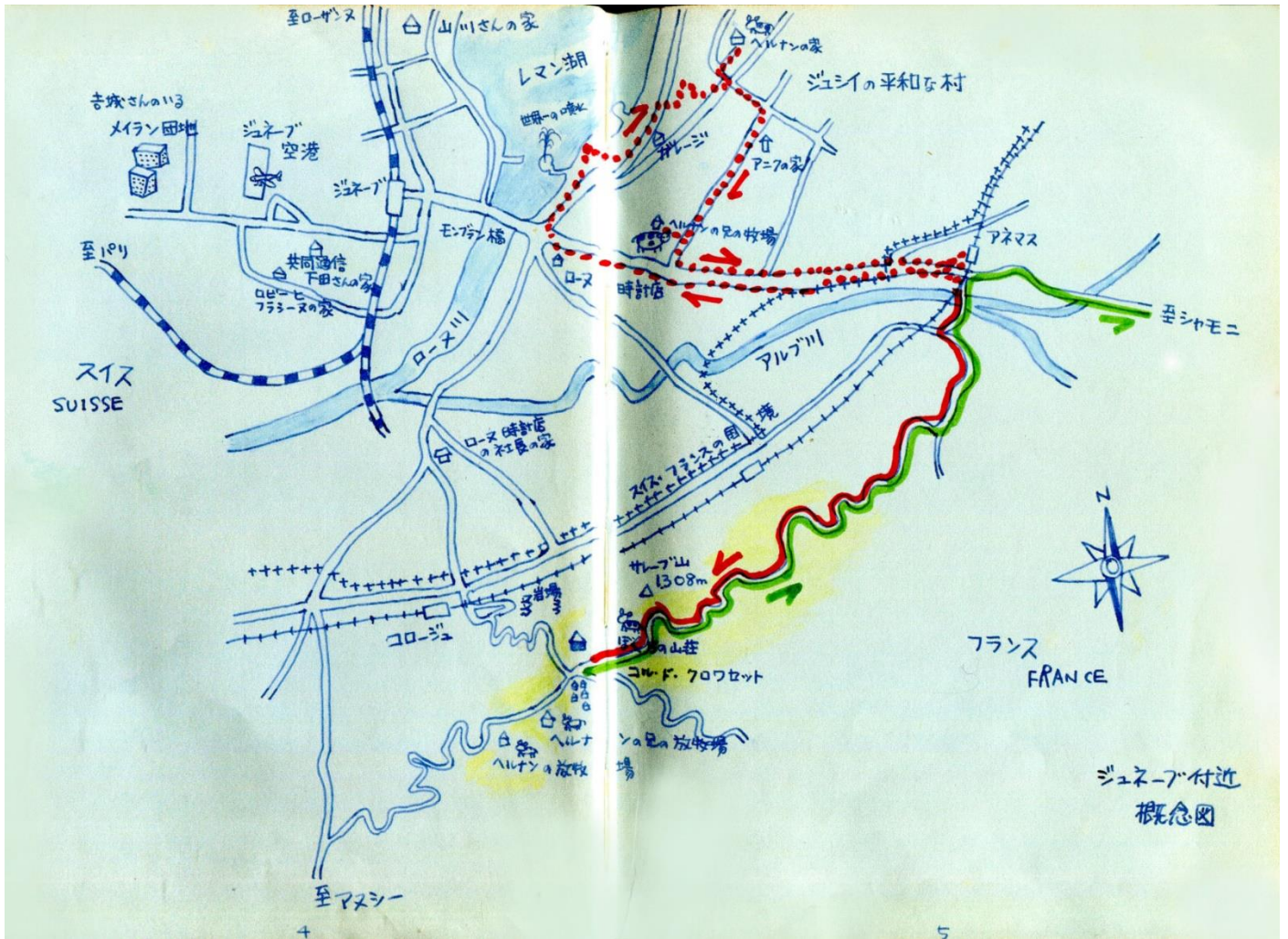
3番目の地図は、野口さんの土曜日、日曜日のたどったルートを赤線で示す。シャモニー組は緑線。



ヘルナン・ブラデボン家の全景



レマン湖で、飛行機のデモンストレーション



オーナー若き日の足跡 No.25 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（23）】

4、五月のたより〈11〉

5月20日（月）

深い霧、そして雨だ。仕事にはならない。下の牛舎へ行ってみると、仔牛たちは大きな塩のかたまりをなめていた。

5月21日（火）

大金さんも含めて5人で下る。シャモニーへ帰る大金さんとは、アネマスで別れジュシイへ向かった。

「野口さん、ほんとうに今日からジュシイかい？」今日からヘルナンの所で働くというのはぼくしか聞いていない。三人共信用していないのだ。

やはり、ヘルナンと働けるのが一番よかった。今日は近くの農園の手伝いだ。温室の中の鉢を外に出した。2メートルほどあるオレンジの木には緑色の実がたくさんなっている。小さい花の鉢をヘルナンと二人で運んだとき、ヘルナンは落とす真似をして二人で大笑いした。

何日ぶりかで楽しい一日の仕事だった。帰路コロージュの岩場へ寄った。もう夏山のシーズン、都会のでトレーニングを始めなければなるまい。ぼくは、ここで仕事を始めてから1ヶ月と10日あまりの間に10キロも太ってしまった。日本ではいくら食べても太りはしなかったのに、やはりいい空気と身体をおもいきり動かし、おいしいワインを飲みたくさん食べているからだろう。これからは、少し控えるようにしなければなるまい。

ここの岩場にはジュネーブに住むアルピニストたちが練習をしにやって来ている。共に練習をしながら、夏の山行のことを片言ではあっても語りながら陽の沈む9時ごろまで過ごす。

充実した一日がじきに終わろうとしている。クロワセットから山荘までの牧草地を、今日一日のよろこびを抱えてたどるとき、また明日を思うとき、とてもうれしい。

星のほほえみに三人の笑顔が光っている。走ったり転がったりしている仲間はほんとうに楽しさを隠しきれない様子だ。歌をうたいながらたどるこの牧草地にも思い出がいっぱいだ。まだ緑の牧草の出ない頃、車で通ったこともあった。露の朝、びっしょりになって通った。タンポポの花が一面に咲きみだれるとき、近藤先生夫妻、山川さんとお母さんも通ったことがある。

今、星の光でほのかに牧草がゆれているのがわかる。

5月22日(水)

ジュシイでの仕事。

牛舎の掃除をしたり、土砂をトラクターの後ろの台車に乗っけて捨てに行ったりする。ぼくの運転だ。広い田園は菜の花がいっぱいだ。まるで牧場主になったような気分だ。

ぼくのお姉さんのような尚樹さんからの便りが届いた。

・・・届いた手紙をにぎりしめると、アルプスの山々が目に浮かびます。アルプスへ行きたい・・・私の夢です。今幸福ですか？日記はつけていますか？どんなに小さなことでも、心で肌で感じたことは絶対に大切なことだと思うわ。アルバイト楽しい？お友だちできた？ガールフレンドは？ホームシックになったら手紙下さいね。・・・

彼女は、ぼくらの親しい山仲間を失ったとき、おふくろが死んだとき、彼女はぼくを励ましてくれた。ぼくの良き相談相手になってくれたのだった。誰にでも暗いどん底に叩き落とされるときはあるだろう。そんな時心から話し合える友人がいるというのは、ほんとうにその人にとって宝物だ。ぼくには何人もそういう人がいた。

【充実した一日】

宝物のような友人たち。

最初の写真は、若き日の野口久義さん。食堂にあるスクラップブックより。山岳雑誌への寄稿文に付けられた写真だ。出典はわからない。

2番目の写真は、野口ペンションの廊下に飾ってあるスイス各地のワッペン。

3番目の写真は、ワッペンの中央にあるエーデルワイス。押し花だ。



オーナー若き日の足跡 No.26 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（24）】

4、五月のたより〈12〉

5月23日（木）

きょうは《キリスト昇天の日》で休日だが、ヘルナンが山荘にくることになっている。でも、なかなか来ないので根っこ掘りを始める。間もなくヘルナンとジャンピエールがやってきた。今日は山荘の廻りの杭を打ちなおし、鉄条網を張った。離れた放牧場へ行ったヘルナンも午後にはグラン・フリッツと来てくれた。

ところが、ヘルナンは望遠鏡を持ち出して眺めたり、休んでいるグラン・フリッツの足をノコギリで切る真似をしたり、またグラン・フリッツはヘルナンの頭をハンマーで殴ろうとしたりして、休んでいることの方が多かった。もうワインの空きびんが2本ころがっている。きょうは休日だからのんびりやったのだろうか。

きょうから5日間フランスはゼネストだとヘルナンは言っていた。鉄道も飛行機も郵便もすべてが動かないそうだ。

夕方手島君と二人で買物に下りる。岩場にも寄ってみたが、ワインの飲みすぎでどこにも登れなかった。

5月24日（金）

南川さんと福田君は帰国のときのビザ（査証）や車の保険のことでジュネーブへ下った。手島君とぼくは放牧地の根っこ掘りだ。

午後2時、仔牛たちに囲まれる中で最後の根っこをひっくり返した。このだっ広い放牧地もついに仔牛たちが短い夏を自由に過ごせる楽園に変わった。仔牛たちもうれしいのか、ぼくらの廻りに寄ってきてペロペロとぼくらをなめ始めた。

午後3時、二人が帰ってきた。すべて計画通りに事は運んだということだ。帰路シャモニー街道の税関でストップさせられたそうだ。タイヤが4つ共磨滅しているから交換しろというのだ。彼らはカムバックし、隣の税関をすんなり通ってきた。このタイヤのことも来週の月曜日にヘルナンがなんとかしてくれる、ということだった。

5月25日（土）

また雨の休日となった。なにも休日に降らなくてもいいのに・・・。

5月26日（日）

きょうも、又雨模様の天気であけた。でも、そのうちに霧がはれて太陽が当たり始めた。きょうはヘルナンがライフルを打ちにくることになっていたが・・・。昼近くになってジャンピエールがバイクに乗って中止を伝えにきてくれた。

昼食後、コロージュの岩場に4人ででかけた。5メートル位の高さの岩だが、ぼくらにどうしても登れないところがあった。ところが、50才くらいで家族づれで来たおばさんがそこを楽々と登ってしまったのだ。ぼくらは、アルプスの大登攀のことなど話せないほど恥ずかしかった。

今度は山荘から近い岩場へ行った。そこには登攀を終えた恋人同士がいて、ザイルを肩にすると「オ、ルボアール（さよなら）」と、行ってしまった。なんてかわいい娘だったのだろう。なんて澄んだ目と声だったのだろう。「あんな娘と一度でいいから登ってみたいなア。」みんなで言った。ぼくらは岩場の下の緑のじゅうたんを敷いたようなテラスにすわりこんで、きょうの出来事や、理想の女性について話し始め、ついに岩登りの道具は一度も出さなかった。

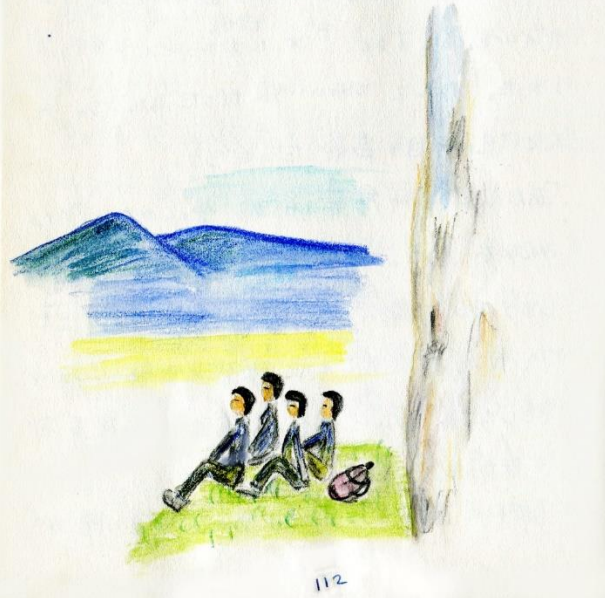
眼下に広がる平野に、きょう最後の陽が当たっている。家々の赤や青の屋根が、菜の花の黄色やレンゲの赤がとても鮮やかだ。その平和な村の教会の鐘が6時を知らせる。その音は胃袋を刺激した。四人は同時に言った。「帰ろ！」

【岩場をはしごする】

コロージュでの岩場の50才のおばさん。ベテランクライマーだったのか、それともその岩場の常連ですべてのルートを知り尽くしていたのか。いずれにしても、ヨーロッパのクライマーたちの層の厚さを感じさせるエピソードでした。

添付した絵は、サレーブの岩場で4人がくつろいでいる様子の挿絵。

当っている 家々の赤や青の屋根が、葉の花や、レ
ンゲの赤がととも 鮮かだ。その平和な村、
教会の鐘が白時を知らせる。その音は胃袋
を刺戟した。四人は同時に、
「帰る！」



オーナー若き日の足跡 No.27 川崎泰照さんの face book より

野口久義著『愛する緑の大地』（25）】

4、五月のたより〈13〉

5月27日（月）

ジュシイへ行く。

きょうの仕事は、道の両側にきちんと並んでいる植木の新芽を切りそろえるのだ。ウサギ位の大きさのハリネズミが出てきたりして、大騒ぎをする。

午後、福田君はヘルナンと一緒にタイヤ交換のためにガレージへ行った。ヘルナンの友人、イタリア人の経営するガレージで格安で四つ共交換することができた。もうどこの税関も怖くない。

新芽を切りそろえる植木はいたるところにあり、まだまだこの仕事は続きそうだ。

5月28日（火）

きのうに引き続いて、南川さんと手島君は道路脇の植木屋さん。シャモニー街道のスイス税関の係官が「ボンジュール（こんにちは）」と言って通って行ったそうだ。一瞬ドキリとしたそうである。もう、覚えられてしまったのだろうか。ということは、もう働いているということを知っているということだ。

福田君とぼくは、奥さんの「アベク、モア（私と一緒に）」に誘われて、牛舎の脇の木苺の手入れだ。草をむしり、杭を打って垂れ下がっている枝を縛りつけた。午後も三人だった。今度はふつうの地這いの苺畑へ行く。でも、ここには悪いのがいた。大きなカタツムリが苺を食べてい

るのだ。このカタツムリは一匹 50 サンチーム（35 円）で買い取ってくれると、プチ・フリッツは言っていたが、福田君もぼくも遠くの方へ放ってしまった。

奥さんは「こっちへ来て。ほら、大きい、大きい。とてもきれいだわ。」と言いながら、赤く大きい苺を見せる。奥さんはそんな食べごろの実をいくつかもいでくれた。そして、ぼくらはカタツムリどかすと、雑草ぬきと、実の下にワラを敷いて歩いた。

夕方からサレーブ山には黒い雲がまつわり、雷鳴が凄まじく、牧草が嵐の到来に怯えるかのようにザワザワと騒いだ。雨が降りだす前にと急いだが、ヘアピンを半分も登ったところガソリンがきれてエンコしてしまった。仕方がないので、また戻り、フランスのスタンドはスト中なので、また国境を越えてスイスのスタンドで 5 リットルだけ入れてもらった。スタンドの人は変な顔をしていたが、明日になればヘルナンのところのスタンドでいっぱい入れられるからだ。

再び戻るころ、ついに待ち切れず土砂降りとなり、雷鳴はなお激しさを増した。

夜も更けて嵐は去った。月と星がサレーブをやさしく包んでいる。ぼくらに微笑みかけているようだ。仔牛たちのカウベルが時々低く聞こえる。

5 月 29 日（水）

はれた日の午後

一面の緑の麦畑の中の一本道

ぼくはトラクターを走らせる

ジュラも

サレーブも

春霞の中にしずみ

ただ、緑の平野のみが広がる

あたたかな陽光

さわやかな緑の風の中を

ぼくはトラクターを走らせる

麦畑を抜け

菜の花畑をすぎ

ぶどう畑を通りすぎた

道はあの空の彼方へ続いているのだろう

エンジンの音

高らかに響かせて

ぼくはトラクターを走らせる

松林を抜け

梨の畑の中の一本道を

ダダダダッと通りすぎた

緑色のおいが鼻をくすぐった

【どこまでも走るトラクター】

みんなで楽しく仕事をしている。

最初の絵は、どこまでも走るトラクターの挿絵。

2 番目の絵は、サレーブの嵐の挿絵。

エンジンの音
高らかに響かせて
ぼくはトラクターを走らせる
松林を抜け
梨の畑の中の一本道を
ダダダッ...と通りすぎた
緑色のおいが鼻をくすぐった。



再び戻るころ、ついに待ち切れず土石が降り
となり雷鳴はなお激しさを増した。
夜も更けて嵐は去った。月と星がサレーブ
をやさしく包んでいる。ほくらにはほほえみかけ
ているようだ。仔牛たちのカラベルが時々低
く聞える。



オーナー若き日の足跡 No.28 川崎泰照さんの face book より

【野口久義『愛する緑の大地』（26）】

4、五月のたより〈14〉

5月30日（木）

フランスはまだゼネストをしている。五日どころではない。いつまで続くかわからないそう
だ。鉄道線路は赤く錆び、税関の係官は二階の窓からポカンとして下を眺めている。いつもはス
イスとフランスの係官とでおしゃべりをしているのに、それのできない係官はぼくらに影響して
くる。

ゲイシャとかフジヤマ、ジャポネ、サケなどとふざける人はいいが、きびしく取り締まる人
には閉口してしまう。

ヘルナンの家に行くと、ヘルナンの友人が来ていた。きょうは、その人のぶどう畑の草とり
だ。ヘルナン宅から2キロほど離れたところにある家で、ぶどう畑はそこから近かった。この
奥さんとガレージを経営する人は兄妹で、この間の日曜日にサレーブに遊びにきた人たちだ。こ
この娘はアニクといって5才。福田君がかわいい、かわいいを連発している。

ぶどう畑はまだ浅黄色に萌えてたばかりの葉を見せている。ぶどうの苗より、廻りの雑草の方
がずっと大きい。人手不足なんだな、と思った。

夕食はアニクの家で食べる。それからヘルナンのところに寄り、ワインを飲む。ヘルナンが聞
いた。

「うちのと、きょう仕事をしたところの奥さんと、どっちが美人だい？」

「もちろん、ヘルナンの奥さんの方が美人ですよ。」

すっかり気に入っている福田君がすかさず言った。奥さんは両手で顔を隠してすっかり照れてしまっていた。

来月の9日の日曜日にぼくらの送別会を催してくれる、ということを知った。ヘルナン一家はどこまで親切なのだろうと思う。ぼくは、もうヘルナンの家で何年も働いているような気がするのだった。

ジュシイをあとに、メイランにある吉城さんの家へ車を走らせた。吉城さんはきのう帰国したばかりだった。お父さんも元気になったそうだった。山の仲間と逢って酒を飲んだり騒いだりで楽しかったが、やはりヨーロッパの方がいい、と言っていた。

帰路、サレーブは猛烈な霧で難行した。山荘までの林の道は真っ暗闇で1メートル先も見えない。福田君を先頭に四人がつながって帰った。

5月31日(金)

イタリア人の経営するガレージでの仕事だ。ここの社長はサレーブに遊びに来たときは冗談ばかり言って笑わせていたが、仕事るときはまったく別人のようになって部下を使っている。年上も年下もない。ぼくらももちろん同等に使っている。きびしい冬山のような気がして、何かすっきりするのだった。

午後はヘルナンの家の庭を二人で掃除する。トチの花が散って大変。5時間もかかった。ポート屋に行った福田君と手島君は、帰りにワインを5杯も飲ませてもらい、チップを10フランももらって上機嫌で帰ってきた。

あしたから三日間、キリストの降臨祭で休日になっている。ヘルナンの家のスタンドでガソリンを満たしてもらってから帰る。夜空に三日月が冷たく光り、風も冷たい。

【かわいい5才のアニク】

アニクのおじさんが経営するガレージでの仕事ぶり。遊びの時とは別人のように変わるおじさん。「きびしい冬山のような気持がする。」

最初の写真は、アニクとその周辺の人々。野口さん以外の三人が写っている。野口さん撮影であろう。

2番目の絵は、サレーブの夜空に浮かぶ三日月の挿絵。



ぼくらの山荘の庭で

前左より ガレージの社長、ヘルナン、アニクのお母さん。

アニク、ヘルナンの奥さん

後左より 手島、福田、野口さん

